看護学臨地実習前後における学生の特性の変化

曽谷　貴子[1]，長江　宏美[1]，太田　栄子[1]，
影本　妙子[1]，新見　明子[1]，登喜　玲子[1]，
黒田　裕子[1]，合田　友美[1]，林　千加子[1]，
岡野一伸子[2]，中西　啓子[1]

Nursing Students' Changes in Character on the Egogram Before and After Clinical Nursing Practice

Takako SOGAYA[1], Hiromi NAGAE[1], Eiko OHTA[1],
Taeko KAGEMOTO[1], Akiko NIIMI[1], Reiko TOKI[1],
Yuko KURODA[1], Tomomi GODA[1], Chikako HAYASHI[1],
Nobuko OKANOICHI[2] and Keiko NAKANISHI[1]

キーワード：看護学臨地実習，自我状態，透過性調整力

概　　要

K短期大学第一看護科では，学生個々の特性や行動パターンを理解し学生の特性にそった個別指導に活用するために，1998年から看護学臨地実習（以下実習とする）前後に，特性調査 PC－TAOK（Permeability Control Power-Transactional Analysis OK 以下 PC－TAOK とする）を実施し，実習を通して学生の特性がどのように変化したかを調査した．

その結果，実習前後で学生の自我状態に変化がみられ，実習後は自己他者ともに肯定する割合が顕著に増加し，状況に応じて自分を変化させられる力である透過性調整力が上昇した．さらに実習中に肯定的な評価を学生に返すねらいでもつ個人面接を取り入れてからは，能力発揮に必要な人格知性のチャレンジ傾向が有意に上昇した．

1．緒　　言

看護基礎教育における臨地実習は，学内で学んだ知識・技術を臨床の場で統合し対象に合わせて看護することを学ぶ重要な目的をもっている．学生は刻一刻と状況が変化する医療現場で，かつて経験したことのない多くの職種が協働する複雑な人間関係の中で，医療チームの一員として実習を行なう．そして科学的根拠に基づいた基本的看護技術や，対象の治療法やライフサイクルの特徴に合わせた看護の特徴を理解し実践していく．

学生達は青年期にあり，この時期は人の発達過程の中では自己形成をしていく時期に該当し，認知傾向や性格特性が周囲の環境に影響を受けやすい年代である[1]．従来，学生はそれぞれの実習部署で経験し学んだことを蓄積し応用する力を備えてきた．しかし最近の学生は，実習での体験を通して学習したことが積み重ならないため，過去の体験を応用することが出来なくなってきている．そのため，実習の開始から終了まで主体的に実習できない学習力の低い学生が増えてきた．このような学生は自己肯定感が低く，自信がないために看護職に就きたいと思ってはいるが，実習に適応できない状況に陥ることがある．そこで，学生が自己肯定感を高め実習に適応できるように，学生一人ひとりの特性や行動パターンを理解した上で，学生に合った指導方法を工夫していく必要性を感じた．

K短期大学第一看護科では，1998年から実習前後に特性調査 PC－TAOK[2,3]を実施してきたが，実習指導の効果をたかめるために2002年からは実習の指導教員

（平成18年9月28日受理）
[1]川崎医療短期大学　第一看護科，[2]適性科学研究センター
[1]The First Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions
[2]Measurement and Research Services, Inc.

全員がこの調査結果を活用し，学生の特性をふまえて実習指導を行っている．また，2004年からは学生の自己肯定感を高める意図で個人面接を行なっている．その結果，学生の特性の様相に変化を認めたので報告する．

2．研究方法

1）調査対象

2000年度～2003年度に入学したK短期大学第一看護科学生，総数331名．

2）調査期間

2001年9月～2005年11月で，調査時期は実習前2年次の9月下旬，実習終了後3年次の11月上旬である．

3）調査方法

(1) 調査用紙は，適性科学研究センターが開発した特性調査PC－TAOK[2,3]を用いた．

(2) 調査項目の用語の説明

交流分析（TA）[4]：交流分析では，我々の心に存在する人格の要素を自我状態と呼び，状況に応じて変化する自我状態に，どのくらいの心的エネルギーを注いでいるのか客観的に観察可能な尺度にかえPACの形で表したものがエゴグラムである．エゴグラムの要素であるPACは，親の自我状態（Parent 以下Pとする），成人の自我状態（Adult 以下Aとする），子供の自我状態（Child 以下Cとする）の3つに分けられ，それらは状況に応じて適切に反応しているか分析することができる．表1に3つの自我状態を示した．

ピーク・エゴグラム[5]：ピーク・エゴグラムは㈱適性科学研究センターの商標登録であり，集団に属するメンバーのエゴグラムの一番高いところを示し，その集団の特徴を表している．

対人関係の基本的な構え（OKグラム・パターン）[6]：自分と他人に対する見方で，自分自身に肯定的か否定的か，他人に対して肯定的か否定的かといった，生きていくことについての根本的な態度のことで自我状態の発揮の仕方に大きく影響する．OKグラム・パターンは，自他肯定，自己肯定・他者否定，自己否定・他者肯定，自他否定に分けられ，集団の基本的な雰囲気を表している．

透過性調整力（PC）：水野ら[2]は，「自我状態間にある半浸透性の境界を通じて心のエネルギーがうまく移行できる程度が透過性であり，その透過性を調整する力が透過性調整力である」としている．つまり，PCは5つの自我状態を状況に合わせて切り替えていく調整力であり，PCが高いと状況に合わせて自分を適応していく力があり，PCが低いと状況に適応しにくいという特徴がある．数値はT得点で平均を50として表している．

人格知性：自分や他人を理解し，状況に合わせて行動していく力を多角的にとらえ，数値化したものである．パーソナルマップは自分と自分との関係，コミュニケーションマップは自分と他人との関係，タフネスマップは自分と組織，コーピングマップは自分の環境への対処の特性を表している．数値はT得点で平均を50として表している．

(3) 調査は，一斉に調査用紙を配布し研究者が質問紙を読み上げ学生が記入したものを回収した．なお，調査結果は学生に返却した．さらに2002年入学生と2003年入学生には，各専門分野の実習後に個人面接を実施した．

表1　5つの自我状態の構成と機能

P (Parent) 親の 自我状態	CP (Critical Parent) 批判的な親の心	良心的で理想を持っている，信念がある，自分の価値観を持っている，人を非難する，人を支配する，自分の思うとおりに動かそうとする，自分の価値観を人に押し付ける
	NP (Nurturing Parent) 保護的な親の心	思いやりがある，寛大，保護的，世話好き，親切，過保護，自立を妨げる，おせっかい
A (Adult) 大人の 自我状態	A (Adult) 大人の心	現実的，合理的，効率的，論理的打算的，現実対応が中心で夢がない，人間味に乏しい
C (Child) 子供の 自我状態	FC (Free Child) 自由な子供の心	自分の欲求を表現できる，感情表現が豊か，無邪気，わがまま，自分勝手，自己中心，幼児的
	AC (Adapted Child) 順応した子供の心	他人に配慮，人の意見を尊重，協調的，集団の和を大切にする，人からの評価を気にする，嫌と言えない，ストレスをためやすい，人に合わせようとする，対人関係に疲れる

4）分析方法

2000年度入学生78名をA群，2001年度入学生81名をB群，2002年入学生83名をC群，2003年入学生89名をD群とし，入学年度毎の実習前後の特性を比較した．

データ解析は統計学パッケージSPSS10J for Windowsを用いてt検定を行ない，グループの実習前後における分析はPearsonのx^2検定を行なった．

5）倫理的配慮

調査時に学生にはPC－TAOKの調査目的，調査結果は成績評価には影響しないこと，プライバシーの保護に努めることを口頭で説明し，質問の回答をもって研究に同意したものとして調査を行なった．また，データは鍵のかかる所に厳重に保管した．

3．結　　果

1）臨地実習前後におけるピーク・エゴグラムの変化

図1～4にA，B，C，D群の実習前後のピーク・エゴグラムを示した．批判する私〈CP〉は，実習前後でA，B，D群に変化は少ないが，C群は11％から4％と減少した．次にやさしい私〈NP〉と考える私〈A〉は，有意差はないがすべての群で増加し，自由な私〈FC〉は，D群では低下傾向を示し，A，C群では増加傾向を示した．しかし，人に合わせる私〈AC〉はすべての群で減少を示し，特にD群では有意差が認められた（$p<0.05$）．

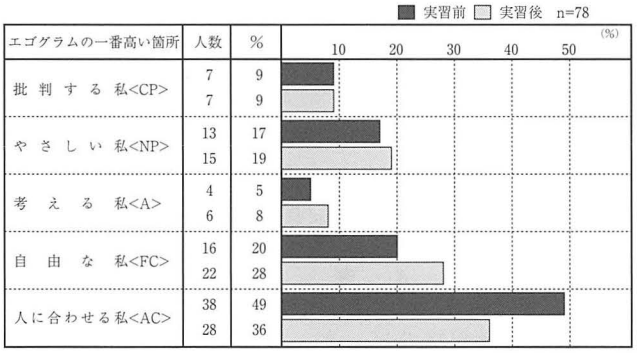

図1　A群におけるピーク・エゴグラム®

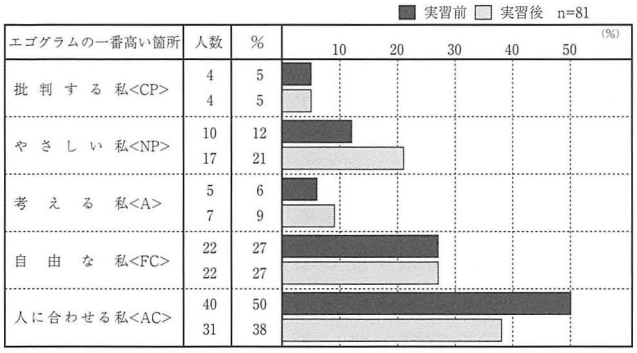

図2　B群におけるピーク・エゴグラム®

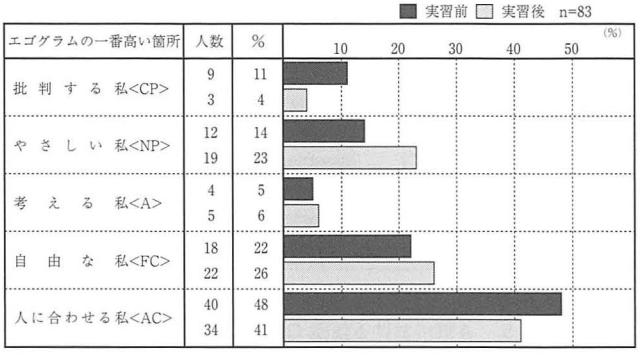

図3　C群におけるピーク・エゴグラム®

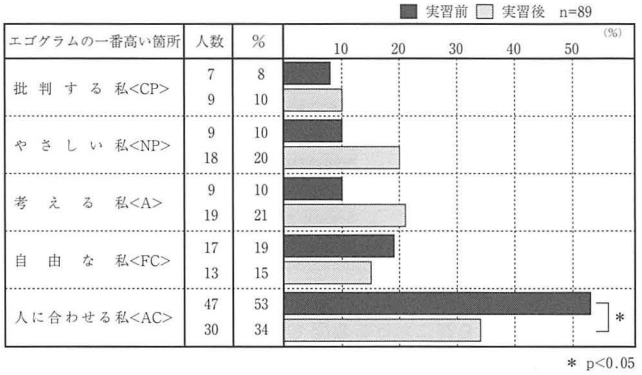

図4　D群におけるピーク・エゴグラム®

2）対人関係の基本的な構え（OKグラム・パターン）の変化

図5～8にA，B，C，D群の実習前後のOKグラム・パターンを示した．実習後，すべての群で自他肯定の割合が有意に増加した（A，B群：$p<0.05$，C，D群：$p<0.01$）．次に，自己肯定・他者否定の割合は，D群が増加傾向を示したが，A，B，C群は減少傾向を示し，自己否定・他者肯定の割合は，B群が増加傾向を示し，A，C，D群は減少傾向を示した．自他否定の割合はすべての群で減少し，B，D群では，有意差が認められた（B群：$p<0.01$，D群：$p<0.05$）．

3）透過性調整力（PC）の変化と状態不安・特性不安の変化

表2にA，B，C，D群の実習前後のPCと状態不安・特性不安を示した．PCは，すべての群において高くなり有意差が認められた（$p<0.01$）．

次に，状態不安（状況に対する不安の程度）は，実

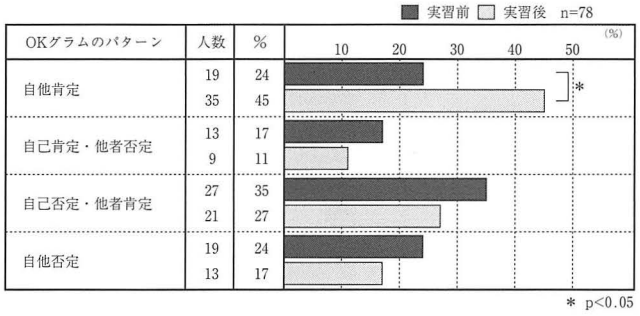

図5　A群における集団 OK グラム・パターン

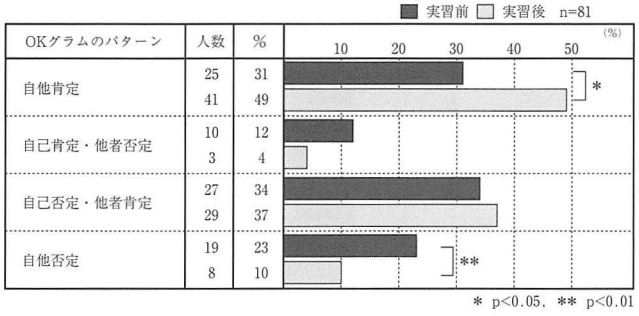

図6　B群における集団 OK グラム・パターン

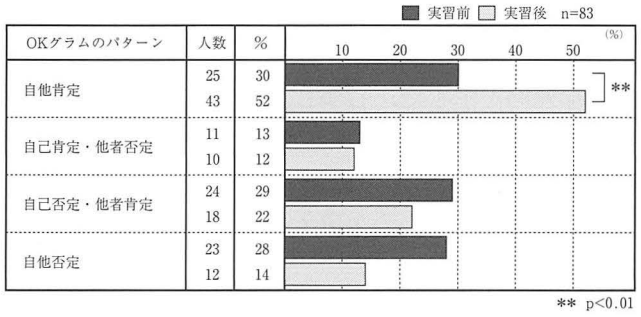

図7　C群における集団 OK グラム・パターン

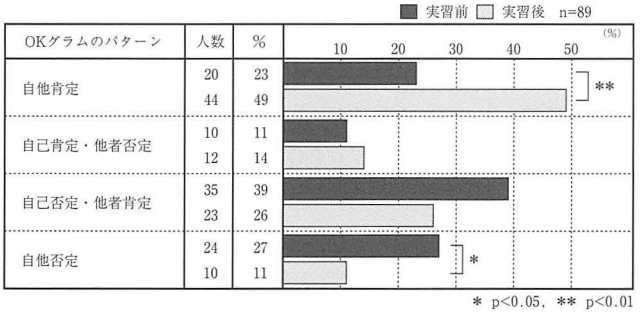

図8　D群における集団 OK グラム・パターン

表2　透過性調整力（PC）と不安の変化

		PC (M±SD)	状態不安 (M±SD)	特性不安 (M±SD)
A群 n＝78	実習前	52±10	49±12	52±12
	実習後	56± 9**	46±10**	47±12**
B群 n＝81	実習前	52±10	48±10	51±12
	実習後	55±10**	48±11	48±12**
C群 n＝83	実習前	50± 9	50± 8	52±11
	実習後	55±10**	46±10**	47±11**
D群 n＝89	実習前	50±10	54±10	53±11
	実習後	53±10**	48±10**	47±11**

**p<0.01

習後にはA，C，D群が有意に低く（p<0.01）なった．また，特性不安（元々もっている不安を感じる程度）は，実習後ですべての群において有意に低く(p<0.01)なった．

4）能力発揮に必要な人格知性の変化

表3にA，B，C，D群の実習前後の能力発揮に必要な人格知性を示した．すべての群で，実習前には自己信頼性，自己表現力，対人主張性，チャレンジ傾向，役割遂行力は平均を下回ったが，他者信頼性，対人感受性，行動柔軟性は55点前後を示し平均を上回った．これらの項目の得点は，実習後すべて高くなった．自己信頼性，自己表現力，他者信頼性，対人主張性，行動柔軟性は，すべての群が有意に高く（p<0.01，対人主張性B群：p<0.05），役割遂行力はB群を除き有意に高く(p<0.01)なった．また，チャレンジ傾向では，C，D群に有意に高く（p<0.01）なった．

4．考　　察

1）臨地実習前後のピーク・エゴグラムと透過性調整力（PC）の変化

ピーク・エゴグラム（図1～4）をみると，すべての群で AC 優位の割合が半数を示している．AC 優位は，言われたことには素直に従い協調性があるが，自己主張できず周りの人の価値観に影響を受けやすい特徴がある．実習後に全ての群で AC の割合は減少しているが依然として AC 優位である．約半年間にわたり，学生は各分野の特徴を捉え，試行錯誤しながら実習に取り組んでいる．しかも，ローテーションにより短期間で看護の対象が変わるため，その都度患者に必要な援助は何か，学生の自分に何ができるのかを模索しながら看護を実践している．このような体験の積み重ねが AC 優位の割合を減少させたといえよう．

表3　プロフェッショナルのための能力発揮に必要な人格知性

		パーソナルマップ		コミュニケーションマップ		タフネスマップ		コーピングマップ	
		自己信頼性 (M±SD)	自己表現力 (M±SD)	他者信頼性 (M±SD)	対人感受性 (M±SD)	対人主張性 (M±SD)	行動柔軟性 (M±SD)	チャレンジ傾向 (M±SD)	役割遂行力 (M±SD)
A群 n＝78	実習前	45±18	47±16	55±20	56±10	35±15	55±9	42±13	47±10
	実習後	51±18**	53±17**	62±19**	56±10	40±14**	58±8**	44±11	50± 9**
B群 n＝81	実習前	45±19	47±16	56±19	57± 9	36±14	55±9	42±13	48± 9
	実習後	50±18**	51±17**	65±17**	58± 7	39±14*	58±9**	41±12	50±10
C群 n＝83	実習前	43±19	46±18	54±17	55± 8	36±12	52±9	41±11	46± 9
	実習後	55±19**	52±18**	62±17**	56± 9	40±13**	58±8**	45±12**	49± 9**
D群 n＝89	実習前	42±18	42±15	55±17	57± 7	34±15	53±8	40±14	46±10
	実習後	52±17**	47±14**	61±17**	57± 8	39±14**	56±7**	46±12**	49±10**

*p<0.05, **p<0.01

その他のピーク・エゴグラムでは，NP 優位とA優位の割合が増加傾向を示している．NP は相手を世話し保護する特徴を示し，Aは冷静で合理的・計画的に物事を判断する特徴を示す．学生は実習で患者や家族の気持ちに共感し，相手を尊重した看護を提供したい気持ちが育っていく．また，グループメンバーとしてお互いに助け合い協力し合う中で相手を認めることができるようになってくる．そして，看護を実践していくためには情報を整理し，患者や家族の状況に対し感情に流されるのではなく，科学的根拠に基づき判断していかなければならない．このような体験をした結果，NP・A優位の割合が増加したと推察される．

次に PC（表2）については，すべての群において有意に上昇した．水野ら[2]は，「効果的で健康な心のエネルギーの流れは刺激に対して意図的に心のエネルギーを移行させていくことであり，また，AC と PC は負の相関がある」と述べている．学生は，患者や家族の価値観を尊重しつつ，必要な看護については納得してもらいながら実習を展開している．このような経験が学生の対応能力を育て，その結果 PC が高まり，逆に AC 優位の割合へ減少したと考える．また，学生は自己形成している時期でもあり，周囲の影響を受けやすいために PC が変化したとも考えられる．

2）対人関係の基本的構えと不安

対人関係の基本的構えの特徴（図5～8）は，すべての群において実習前には自己否定・他者肯定パターンの割合が多く，実習後では自他肯定パターンの割合が有意に増加した．この対人関係の基本的構えと TA については，AC が高いと自己否定が強い関係にあるといわれており[3]，ピーク・エゴグラムのすべての群の結果も同様であった．実習後に自他肯定が高くなったのは，自分に自信の持てなかった学生でも，自分の取り組みを周囲から肯定的に評価されながら，学生同士の意見交換や相互協力によって困難な状況を乗り越えた結果と考える．

不安と PC とは負の関係にあるといわれている[2]．状態不安は外的状況に対する不安であり，特性不安はその人の成長過程により特徴づけられる不安を感じる内的傾向である．学生の特性は AC 優位を示しており，周囲の状況に敏感であり他者からの評価を気にするため，より不安を感じやすい．しかし，実習では刻々と変化する状況を予測，察知して，それに対応していくために自分の自我状態を切り替えていく力である PC が必要となる．様々な出来事に遭遇，対処しながら実習をやりとおしてきたことで PC は高くなり，反対に状態不安は低下したと考える．また実習や面接を通して自分を認められた経験から自他肯定が上昇し，自信がつき始め特性不安が低下したと考える．

3）専門職としての能力発揮に必要な人格知性の変化

専門職として自己信頼性，自己表現力，他者信頼性，対人主張性，行動柔軟性は必要な能力である．それらが実習後に有意に上昇したことは，すべての群の AC 優位の割合が減少したことや自他肯定の割合が増加していることと関連している．

対人主張性に関しては，実習後低値ではあるが，有意に上昇している．これは，自分の考えを主張するよりも周囲の状況や意見により行動を変容させる傾向はあるものの，実習での体験や指導により，望ましい方

向に変容していることが伺える．

役割遂行力とチャレンジ傾向は，状況の中でどのように行動していくかを見ている．役割遂行力は，A，C，D群に有意差を認めている．学生にとって，臨地実習でリーダーシップやメンバーシップをうまく発揮させることや，患者に即した看護技術を提供し看護過程を展開することは大きな課題であり，それをやり遂げたことで達成感が得られ有意に変化したと考えられる．そしてC，D群では学生が個人面接を通して肯定的支援や指導を受けつづけ「自分でもやれる」と感じ，自己信頼感が生まれ「次も何かしてみよう」というチャレンジ傾向を上昇させたと考える．

5．おわりに

看護基礎教育における臨地実習は，学生の人間性が大きく成長する機会である．今回の特性調査の結果，実習後，人に合わせる私〈AC〉・やさしい私〈NP〉・大人の私〈A〉や透過性調整力〈PC〉，人格知性が望ましい方向に変化した．しかし，実習後のチャレンジ傾向が平均より低く，卒業後の環境により容易に変化することが危惧される．そのため，引き続き教員間の連携を図りながら，支持的な指導，さらに臨地の指導者とも協力しながら効果的な実習指導を模索する必要がある．

謝　辞

本調査研究にあたり，ご協力くださいました第一看護科学生・教職員の皆様方に深く感謝いたします．

文　献

1）鑪幹八郎：アイデンティティの心理学，東京：講談社，pp. 61—62，1997.
2）水野正憲，新里里春，岡野一央博，桂　戴作：透過性調整力を加えた行動エゴグラム「S-BE（エスビー）」の信頼性と妥当性に関する研究，交流分析研究　20(1)：45—51，1995.
3）水野正憲：基本的構えと自我状態 — 基本的構えを加えたエゴグラム TAOK による分析 —，交流分析研究　23(1)：7—12，1998.
4）白井幸子：看護にいかす交流分析 — 自分を知り自分を変えるために —，東京：医学書院，pp. 6 — 9，1987.
5）新里里春，水野正憲，桂　戴作，杉田峰康：交流分析とエゴグラム，東京：チーム医療，pp. 133—135，1998.
6）前掲書 5），pp. 29—31，1998.
7）水野正憲：独自性欲求と自我状態・透過性調整力との関係，岡山大学教育学部研究集録　100：11—18，1995.
8）加城貴美子，稲垣行一郎：自我状態の透過性調整力についての基礎研究 — 透過性調整力と各自我状態との関係について —，川崎市立看護短期大学紀要 6(1)：85—91，2001.